七夕考

ヲ 6
1161

七夕考

全

ヲ邊6
1,161

門 ヲ176
1161
巻

明治二十九年四月廿一日
市島謙吉氏寄贈

京都帝国大学図書

七夕考

神代巻曰伊弉諾尊伊弉冉尊立於天浮橋之上共計曰底下豈無國歟廼以天之瓊矛指下而探之是獲滄溟其矛鋒滴瀝之潮凝成一嶋名之曰磤馭盧嶋

同一書曰陰神先唱曰美哉善少男時以陰神先言故為不祥更復改巡則陽神先唱曰美哉善少女遂將合交而不知其術時有鶺鴒飛来搖其首尾二神見而学之而得交道

同至於火神軻遇突智之生也其母伊弉冉尊見焦而化去遂按所帶十握劔斬軻遇突智為三段此各化成神也復劔又垂血是為天安河辺所在五百箇磐石也

同又見天照大神方織神衣居齋服殿
同或云味耜高彦根神之妹下照媛欲令衆人知映丘谷ニ者
是味耜高彦根神故歌之曰阿妹奈屡夜乙登多奈婆多迦
汙奈餓勢屡多磨迦弥素磨屡迦阿奈陀磨波夜彌多爾輔
枹和枹邏須阿泥素企多伽遊顧補
同天孫又問可其矜秀起浪穂之上起八尋殿而手玉玲瓏
織紝之少女者是誰之子女耶答曰大山祇神之女等大號
磐長姫少號木花開耶姫亦號豊吾田津姫云云
右秘傳アル一ナリ三請草ニ詳ニ考知ベシ
古語拾遺曰令天羽槌雄神倭文遠祖也織文布令棚機姫神織
神衣所謂和衣古語爾伎多倍
同言餘鈔棚機姫神織神衣者非謂牽牛織女本吾国之神
也舊事紀云云
倭姫世記曰興齋宮于宇治縣五十鈴河上大宮際令倭姫
命居焉即建八尋機屋令天棚機姫神孫八千千姫命織大
神和妙御衣譬猶在天上之儀神祇令神衣祭義解麻績連
等織敷和衣以供神明故曰神衣所謂者指神祇令世紀等
也神名式尾張国山田郡多太波太神社同節解曰機棚ハ
棚ノアル機也又機ノ上ニ布帛ノ糸ヲ引テヲルハ棚ノ如ナレハナリ
故棚機ト云姫ハ女ノ才ル物ナルニ由テ云七夕ノ夜ノ牽牛織女

ニハアラス日神ノ御衣ノ織ルシリヒメト云女神ノ也所謂和衣
ト倭姫世記曰興齋宮于宇治縣五十鈴河上大宮際令倭
姫命居焉即建八尋機屋令天棚機姫神孫八千々姫命織
大神和妙御衣云云和衣ハ濃ナル衣也妙ノ字絶ノ字モ用
訓ソカル絶ノ字キヌヒヨメリ伊勢齋宮ノ立玉フ時ハ磯宮
ニ機殿ソ立テ大神ノ神服ソ棚機姫ニシラサシメ玉フ四月十日
ソンソ祭ノ日ト云テ女子女工ノ一ソセヌ事ナリト云大神ノ
御衣ソ九月ニソル故ニ處人ハ忌憚ルコトナシ
公事根源曰天七日ナリ八郎ノ行てとをり云拭衣に入
て毛巧奠ノ所殿の庭ニ忌ヒ清めて灯蓋

カケ有ノ灯いうち机ヒ上ニ乃ち人ハ手ヲ
ちらたて是をおく法ノ之ノ上ニ十夜七十ノ
たくうきあるあるひ人ハ入ル人ハ是ヲ見ル
をちまとの板ノ法ハ秘ノ法ハ密ニ伝ル事律ノ法ハ
ハなき是ハ秘事ノ伝ル故ニ十夜ノ間ハ是ハ
時ニ行ハるる天平勝宝七年ニ天ノ下ノ
幸牛御世ふたつの星ハ
日ハ歳時記曰七夜二星を
会ハ七夕ハ是ハ天ノ川ふ
なしとして事ハ

こゝろへ有故假名にかきし書を次第に丹書
日本にては天平勝宝七年に始りしよし筆板
源氏物語 御世々の儀式 延喜式 江家次第等に詳し 又ちかき世に至りて白河院の御代に
を萬葉の古歌を硯にうつして梶の葉十かく事新
勅撰集のために
萬葉にも天の川の梶の葉をさゝげし故にかきしの梶にかきつらね 萬葉にもなし
八雲御抄云
七月七日をなぬかの月といふ 七夕
日本紀にも七月七夕撰りて定こりしと其年の
も拾ひて萬葉十経奇日あまつ星に手向しあま
の河にむかひ立て相まちしかひのまたに
ひとゝせにひとたびあふてふ甚夜二のかさゝぎの
もしとかく又牽牛織女にたむけの
もしもとめのみきりてちつきはふね
らかすてはむかへもなしあはせてむかふるを
ども一定の説なし御歌には天の川をかの雁
詠みにもくれてふなつまへのくちのきる
こゝろをもやれにのもとみせふれいとさいへつ
歌には天の川せつなくとよみつるとえんともつる
もあはれさやすのかいつせとふねなきとあむ

くらゐ二百余年つゝあるさきの王位をうけ又あみち
のたしい流はあふいうけ毎年に六月
松のい合月入給いつふ法わく 仙百年の間拾遺抄
七月はふるのうたしまひかゝうに月夜十五夜うち
見うたい入らぬたく雲はかゝるさたるをいつを
百余年に七月のいんそてあるひの秋うに夜た
きゝうきうん又ありきたるふたうたく夜てゝ中とと
四〜にあふたうたしあふい神代十四月きたに
きたくいつ夜をありきうく古拾遺二月人たり又百余
十人りれ天のおしてとえふしゝ人をてわたし神代の
抄

是神代にうあるうしなるをふしうたし一
たのをうの川水のなにいうまのかるやをゝ
りゝ天照大神のりうをわすれ給し不りう法神
いのうはしゝ一ふゝ見る人法人えをし四位也
七月のはるの月のとに初しをはつ云行基の
ゝ法くゝそはくゝるはあうあるいつふい二月はた
いうふうん神後ゝ古をを七月はをしつを一位月の今
位脇 打殺 をはをいに いそをきて 毎年ゆうをいつて
ゝをゝ一のしゝゝゝあをを法ををふ法ををゝ
毎の月のあるをうをゝ人のまゝ人をのいの京に

[illegible]

萬葉和歌集八

山上臣憶良七夕歌十二首之内

天漢相向立而吾戀之君来益奈利紐解設奈

右養老八年七月應令

久方之漢瀬爾舟泛而今夜可君之栽許来益武

右神亀元年七月七日夜左大臣家

牽牛者織女等天地之別時由伊奈宇之呂河向立意空不

安久爾嘆空不安久爾青浪爾望者多乎奴目豆爾滂者盡

奴加是耳也伊伎都枳乎良武如是耳也戀都追安良牟佐

丹塗之小舟毛加茂玉纒之眞可伊毛我母朝奈奈敵爾伊可

伎渡夕鹽爾伊許藝渡久方之天河原爾天乎也領巾可多

思吉眞玉手乃玉手指更餘宿毛寐而師可聞秋爾安良受

登母

右天平元年七月七日夜憶良仰觀天河

牽牛之迎嬬船已藝出良之漢原爾霧之立渡

霞立天河原爾待君登伊往還程爾裳襖所沾

天河浮津之浪音佐和久奈里吾待君思舟出爲良之母

湯原王七夕歌二首

牽牛之念座良武從情見吾幸苦夜之更降去者
織女之袖三更之五更者河瀬之鶴者不鳴友吉

萬葉和歌集十

柳本朝臣人麿七夕歌九十八首之内

天漢水左閉而照舟竟舟人妹等所見寸哉
久方之天漢原丹奴延鳥之裏歎座津之諸手丹
天漢安渡丹舩浮而秋立待等妹告與具
八千戈神自世之嬬人知爾来告思者
天地等別之時從自嬬然叙手而在金待吾者
久方天仰等水無河隔而置之神世之恨
汝戀妹命者飽足爾袖振所見都及雲隱
天漢水陰草金風靡見者時来之
爲秋登織女之其屋戸爾織白布織足兼鴨
天漢梶音聞孫星與織女今夕相稱
一年遍七夕耳相人之戀尤不過者夜深往久毛
天漢安川原定而神競者磨待無
作者未詳七夕歌
牽牛與織女今夜相天漢門爾波立勿莫

秋風吹漂蕩白雲者織女之天津領巾
天原往射跡白檀桙而隱在月人壯子
足玉母手珠毛由良爾織旗手公之御衣爾縫將堪可聞
擇月日逢義之有者別乃情有君者明日副裳欲得
天漢瀬毎幣奉情者君手幸来座跡
天漢棚橋渡織女之伊渡左年爾棚橋渡
天地跡別之時従久方乃天驗常吳天王天之河原爾璞月
累而妹爾相時候跡左待爾吾衣手爾秋風之吹反者立坐
多土伎手不知村肝心不欲解衣思乱而何時跡吾待今夜
此川行長有得鴨

萬葉和歌集十七

十年七月七日之夜獨仰天漢耶述懷一首

大伴宿祢家持

多奈波多之船来須良之麻蘓鏡吉欲伎月夜尓雲起和多流

七夕歌一首并短歌

安麻泥良順可未能御代欲里夜洲能河波奈加爾敝太豆
豆牟可比太知蘓泥布利可波之伊吉能手爾奈氐加須古
良和多理母理布禰毛麻字氐受波之大爾母和多之氐安
良波曽能倍由母伊由伎和多良之多豆佗波利宇奈我既

利爲豆於母保之吉許登母加多良比那具尤牟流許己呂
波安良年乎奈尓之可母安吉尓之安良祢波許等騰比能
等毛之伎古良宇都世美能代人和禮母許己宇之母安夜
爾人須之弥往更年能波奥登爾安麻能波良布里左気見
都追伊比都藝爾須禮

反歌二首

安麻能我波波志和多世良波曽能倍由毛伊和多良佐乎
乎安吉爾安良受得物
夜須能河波許牟可比太知豆等之能古兆気奈我伎古良
河都麻度比能欲曽

右七月七日仰見天漢

万葉和歌集秋歌上

妹風流歌　日ゝ久方乃天の川原に出立ちて
久方乃天の川原の白妙の
天の川瀬に袴ぬらしつゝ
為ゝて待つ夜はいとゞ天の川
天の川瀬を渡りなくなり
おれ〳〵の時きこえの高ければ
万葉和歌集合めり
藤原あきあ

なぬかの日は夜ばかり

元治元年

七夕

七夕がはの水は千とせ

ながらへて今年と限る夜や流れん

千せい

ことしこそ人まちがほなれ七夕の久しき袖に涙こぼれん

なぬかの夜は曉にぞなる

原もみぢ

今はとてあかしけれども天川流れ思ひきて袖をひたすも

ふるのたて

七夕の日よみ侍る

七夕ばかりは今こそ年の波をとりつるかなる袖ぬれぬ

京の業平朝臣

秋風吹く日ぞ久しき天の川よたゆる日はなしと

一年に一度とたのむ御世なれば秋の風吹くと云ふ

秋の風吹くと天川原にうぬ日はしるし

百草に秋風吹く日ぞ天川流れにいてゝ流

とつぎこそなと云ふ歌お図ち行平

とて小倉ゐしやいとひ南御世をあらむ二社のうち

川あり天にと若ばく世を浮んとこそ御世の高こそ

[illegible]
七日の夜まふいたる中に物を結びてたる上中下
三つ水を入てるゝ〳〵てたゝ物ハ上中下に男女を去
てあをしてたゝわふうゝるゝ[illegible]てて
男女ゆきゝもしゝ海をせんとて天にのぼりたる
ハ日をなしゝひとつを

本朝文粹八

七夕代牛女惜曉更應　制　野美材

夫七月七日靈迹佳期也仰秋河耿々瞻白氣之爽々守夜
之人以此爲應登仙之語信而有徵今々詔詩臣司允儷相
親天人惟一易離難會今古所傷宜代牛女深惜曉更臣奉
綸綍敢獻菊韻原夫二星適遇未叙別緒依々之恨五夜將
明頻驚涼風颯々之声時也香筵散粉絲縷飄空宮人懷私
之願似面不同墨客乞巧之情隨分應異臣有一事非冨非
壽家貧親老庶不擇官云尓

七夕陪秘書閣同賦織女雲爲衣應制

江以言

金商七月之候銀漢二星之期綺節麗辰之標名露布於四民之令詞人才子之傳頌風羅於万代之文

聖工製金殿排石渠列星位石風人香粉曉散遠咲秦城宮掖之雲玉簾晴披長嘲周王羽陵之露蓋乃聖範好文宸旅鑒古之至于時仙星增餙絲雲爲衣裳居露綃待鵲翅之南北襲備寛裳亦從龍蹄之去留至知夫楓風吹兮易亂桂月臨兮欲晴裁無刀尺經西母之路而爾縫深有淺深遂子高之駕而潤色者也既而玉井影上銅水聲移醉天尉湛々之恩乞星躔爽々之巧以言取衣毋螢而成功雖歡屬竟日之南明問青鳥而記事猶恨暗漢雲之子細送隔羽服之化忽列仙衣之衿云尒謹序

本朝一人一首

七夕

山田三方

金漢星榆冷銀河月桂秋靈姿理雲髮仙駕度横流紛飛鳴衣玉玲瓏映彩舟所悲明月夜誰慰別離憂

七夕

吉知有

冉々折不留時節忽驚秋菊風披々霧桂月照蘭洲仙車渡

鵲橋神駕越清流天庭陳相喜華閣移離愁河横天欲曙更
嘆後期悠

七夕後朝

仙娥其奈漢河頭帰處天明怨不休別涙數行朝露落去衣
一對曉雲愁前期何夜唯占昨後會從今又待秋來興難忘
風月味欲從此席万年遊

七夕　藤原房前

帝里初凉至神衿翫早秋瓊簾振雅藻金閣啓良遊鳳賀飛
雲路龍車越漢流欲知神仙會青鳥入瓊樓

七夕秋意各分一字應製　菅右相

箒取漢頭牛女心秋懐自與夜更深竹窓風動笙歌曉意緒
將穿月下針

七夕應製　同

今夜不容乞巧兼唯思萬歲聖皇后明朝大史何来奏更有
文星映玉簾

逢夕卧池辺遥瞻肆遠天不知鳥鵲意何似遠神仙

本朝詩英　布留高庭

七夕

續古今和歌集

天の川やなかれはせいの水にあらうゑて秋風ぞふく　山邊赤人

同集

天にいうつる星の戸と時しもあれ秋の七夕年の立しる夜　大納言定家

風雅和歌集

七夕のあせにうつるてしのやおのの浦もあのくもりなりけり　大宰大弐重家

七夕

延文百首

神代よりいかなる日せちにてかかる別ては七夕の詠あるらん　為忠

七夕

新千載和歌集

天の川ふねをうかべてこぎ出しそ神代の昔思ふ人

文治六年七月七日歌合　円天台公教

早合の船をはせの水に伊勢海の神代のむかしこひわたる　藤原定家

同

あうぎのはちさふかぜよ七夕はせをあのさひの天の橋立

七夕　藤原

・新勅撰

うるにそむ秋の一夜の袖つまの神代のもとは早合の手

同　鳥羽院御製

めくりあふ二の星やかさねたのしきねに笑ぞ天のうき橋　秋香

同　七夕祝　　清水尾院御製

星合のそらも千とせへん君と代と身をいつもせまくせての契そ

前太政大臣基煕

後せし契にわかちとせとにとにかも二の星をたのめしに

乞巧奠　　前太政大臣

新葉和歌集

庭の面にむかひてまつるそのことの葉雲井はるかに軒の松風

続千載和歌集　　後京極摂政太政大臣

星合の空の光となるものは雲井の庭にてらすともし火

六百番歌合　　前権中納言定家

秋ごとに絶ぬ星合のさよ更て光ならぶる庭の燈

内　　孔帖

定おく星合の空に思ふとしられ秋の思ひてこそもえしく

宝治百首　　前太政大臣

白露の玉にひかりをまかへして庭にかゝる秋の燈

同　　実暁

七夕にしてものをいはぬ笑のたのもしそなり

舞西

同

ふるさと水辺の蛍あやそらにて七夕まつる夜いとにうつ

太宰

同

夜半にれをやらう灯乃消てきゝ玉はゝ初に

同

夜半はりいとのゝれ長していかてきみをうらみつゝ

元弘之后屏風

内大臣

あまつ雲ゝ代の光こゝ初ふるゝ宮の夜の灯

年中行事歌合

七夕

七月七日牽牛織女ノ星合ヲ巧算ノ我国古ヨリ多メトアリ

ニテ多メナハメノ神代ヨリ傳アリ然ニ歌人詩人モ異国證

ヲ用ヒテ證トシ偏ナル儒者ハ是ヲ謗リ是皆我国ノ神道衰神

書ヲ学ハズ異国ノ書ノミニナレテ和書ニオロソカナル之ニ

ヨリ根源ヲ忘レ枝葉ニ走ル奇中神世ヲ忘レ

ヲ代ヲ鳥船ノ川ヲ渡リテ七夜ノ橋

なして御女ヲ求ルスル所南ヲ書ヲ文

後漢書に記高祖陽城の武丁といひし人伝を牙に
ゆりて曰七〇七〇ふ御世に御を御とる牙にたりし
と御とといひしを御世に御とる章牛に清をとる
をと御世章牛はさはく良うとも世人牛伝をとる
るをとるしるおこきて七〇あふたをし者をと伝人伝貞
を綱へて御をふ御をとるを牛のをに七御をとる
て章といのるに章の内ふへ必けるつるのに乞巧
しく郁俗い猪牛の書伝と阮咸八年上の猪と
ふ御たのをと伝るみや

伝を歳に記ふ云七〇七〇七〇又章牛に前楚歳
伝ふいて七〇七〇織女章牛裏合の夜く歩数俎に伝
御世章牛のの後漢書伝記ふ清を武丁を妻をいけ情和志
しい牛織の浪漫を記せるをきい婦人女子の伝を以実し
すると所く文人墨士をして常法を天上の別宮をして
清織をかもしもしふ章のやしもしてを人と御せり
御ふ雅編と云へ神事かやはをきふ人しくをふ章
四をを人とをして祭せをふをして歌人て巧歌の料を伝を
山をのをとをの人ふ見ふなをの毒をふ又山事なしと
をを歳に見ればしふ牛をを天を恐をを新秋を京を風

和歌ハ詩歌の科ハ仮名を心あらん人ハ心まいらせんと
あらかゝ又ハ仮名ハ三ヶ月ハ三ヶ月ハ三ヶ月ハ雨ハ雨ハ雨
紀貫之ハ七夕の歌ハ酒ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨
伝ハ七夕の歌集にハ人しる
天の川水ハ清ハ秋風ハ吹きハ
乞巧奠の儀ハ秋風ハ吹きハ
婦人女子の風ハ
石二書ハ考ルニ公事根源ハ條大閤藤原兼良公ノ作ノ博識
ニテ和漢ノ書ニ達シ神道モ学ヒテ代表ノ疏ノ著シ名人

人ノ為ニ異国ノ古事ノミヲ利用テ書出サレハ如何ナル意ノ
ヤリ難キヤノ疑アルヤ歟時記ハ貝原篤信カ作ノ是モ博
ノ書ニ博識ナル者也ヨトニ我国ノ古事来歴ヲ考出シ精力ヲ
盡シ品々益アル書多シ然ルニ如此七夕ノ事甚詳ニ書ルハ何
ノ故ヤ其上万葉集ノ歌一首書載タリ人丸ノ歌ニ神代ヨリ
七夕ノ證アル歌多シ此ノ書出サレ何ノ意ヤ何モ異国ノ書ニ
倣ヒ我国ノ尊ノ心暗ニテ自ラ如此ナルヱヘナルヘシ予是ヲ
憂ヘ考ル所ノ抄書ノ一冊トナセリ夫陰陽和合ハ天也夫婦
和合ハ人ノ天人唯一ノ道ニ其理隣ナリ陰陽ノ捨テ天道ナリ夫
婦ノ捨テ人道ナリ是道ノ根本ノ牽牛ハヒコ星ト訓ス織女ハタリ

ヒメモノナバメモ訓ス人ノ道ニテハ牛ハ天子ノ御車ヨリノ其ハ下ニテ車
ヲ引器財ヲモ車ニノセテ引者ハ田ヲ耕ニモ牛ヲ引テ農業ヲ勤ル者
ハ人力ヲ助ルモノナレハ獣ノ中ニ牛馬ヲ第一トス牛ヲ牽モノハ男ナリ
男ハ彦ト云事ナケレハ上下位ヲ分ナ難シ田ヲ作ラサレハ生命ヲ
保ナカメシ古ハ天子自ラ神田ヲ作リ玉ヒテ其稲ヲ以テ神ヲ祭リ玉フ
機ヲ織テ衣ヲ作ルハ女之是ヲオリヒメノナハメノモ云衣ハ唐ヲ藏シ
寒暑ヲ凌キ宮服常服上下ヲ分ツモノ也古ハ后妃自神衣ヲ
ヲリ玉ヒテ神ニ供ヘ祭リ玉フ一ヘニヨリ地ニ牛ヲ牽男衣ヲ織
ル女アリ夫婦アルハ夫ハ牛ヲ牽テ田ヲ耕シ婦ハ機ヲ織テ
身ヲ養フノ第一此二ツニアリコヽヲ以テ天ニ牽牛織女之星アリ

屋ハ金気ノ天河ハ水気星ノ集ル所ノ邑ヲ都トナシ玉ヒ數鳩ノ宮ヲ立テ始テ御即位ヲシヽヨリ
天上トスユヘニ宮前ヲ流ル川ヲ天安川原ト云ヒ天河モ空中
帝座ノ前ニアリ天人唯一ノ理リナリ七月ハ秋ノ秋金気ノ七日ハ
金気一候ノ成ル始メノ爰ヲ以テ星ヲ祭ルヽ其上秋ハ稲ノ熟ス
収ル時ノ蠶ノ糸モ成テ絹ヲ織ル節ナレハ牽牛織女ノ星ヲ
祭ルモ宜ナル夜ヽ此二星ノ名異国ノ書ニアルト覚ルヲロンカナ
ルヽ神代ヨリノ星ノ名アリ乞巧奠モ夫婦ノ幸ヲ祈ルハ理
リアルヽ鵲ノ橋ハ天ノ一ニメノ橋ハ陰陽ノ通スルヲ云天浮橋ノ
コトハリヨリ出タリ中納言家持ノ歌ニ

カサヽキノ渡セル橋ニシクモノ白キソミレハ夜ノ更ニケル

此歌ノ意ニテ見ルベシコレ曉ノ霜ニサヘ〳〵タル天ノ景気ヲ詠ジタル

月落烏啼霜滿天此詩ノ意自合セリ然レハ鵲ノ橋ハセタメニ

限ラヌヲ〳〵カサヽキトネヲハ猶傳アル〳〵紅葉ノ橋トヲモ

秋ノ気ニ付テノ色アル所ヲ云此モ橋ヲ云ハ浮橋ヲ陰陽通メ

和合スルハ天ノ浮橋ヲ夫婦情ヲ通ハメ和合スルハ人ノ浮橋ヲ

猶委キ傳〳〵アル〳〵ケレモイヽタ其書ヲ不見神道ノ傳ニテ

書ヲウシタル書モヲ考合セテ大略ヲ書述ル者也

正德壬辰七月日

光海翁識

享保十一年丙午五月十五日以　重垣翁自筆書

寫之

燒鎌

享保十五庚戌八月五日以　清地翁手書本謹

書寫之畢

近藤備那

延享三丙寅十一月晦日謹寫之畢　伊橋勝安

明和三丙戌六月九日謹寫之訖　宮内親寛